

# 東京湾再生推進会議 これまでの活動の総括(期末報告書の要約)

## 背景

東京湾は後背地に人口密集地帯を有する閉鎖性海域であり、流入する窒素・りん等による富栄養化が進行し、赤潮青潮等の発生がみられ、生息生物に悪影響を及ぼしている。また、干潟・浅場などの埋立により、生物が棲みやすい環境や自然浄化機能が減少していること、漂着ゴミなど沿岸域の環境の悪化も問題となっている。

## 目標

快適に水遊びができ、多くの生物が生息する、親しみやすく美しい「海」を取り戻し、首都圏にふさわしい「東京湾」を創出する。

## 取組

- 【陸域対策】 東京湾への流入負荷削減のための污水处理施設等の整備、雨天時の流出負荷低減、面源から発生する負荷の低減等の対策が進められた。
- 【海域対策】 底質改善のための覆砂、干潟・浅場の造成等が行われた。また、人工護岸についても生態系に配慮した構造とする等の施策が進められた。
- 【モニタリング】 モニタリングポストの設置や一斉調査の実施により湾内の環境の経年変化、季節変化や貧酸素水塊の発生状況を把握する取組が進められた。

## 成果

- 一部の水質の改善や生物種・個体数の増加が見られた。
- 環境の経年変化、季節変化の把握がある程度可能となっている。
- 地域住民等にとっては、東京湾の環境への関心が高まりつつあると思われる。
- 取組の成果は、各種調査やモニタリングの具体的数値等として表れはじめている。
- ただし、底層のDOについては、期待した改善が見られなかった。

## 評価

- 各取組において東京湾の再生を目指して連携してきたことは、有意義であったと思われる。
- 東京湾の環境再生は、数十年の単位の計画で取り組まなければならない課題であり、未だ道半ばである。
- 魅力のある東京湾の姿を取り戻すためには、今後、さらなる努力・取組が必要である。